

帯刀 治所員・元所長，田切 美智雄所員，大槻 功所員を送る

2009年度年報の冒頭で、今年度いっぱい退職される所員の皆様をお送りする言葉を地域総合研究所を代表して述べさせていただきます。

帯刀治所員は1991年4月から1999年3月までの8年4期を所長として務められ、その間、日立地域に関する共同研究を組織しながら、93年3月には常陽銀行の寄付によって現在の研究所施設である「常陽亀山記念館」竣工を実現するなど、研究所の土台を築く大きな貢献をなされました。帯刀所員は、1968年に茨城大学人文学部社会学教室助手として赴任され、その直後から、地域総合研究所で開始された「鹿島臨海工業地帯」についての総合研究の中心メンバーとして所員活動を開始されています。地域総合研究所年報第1号は1969年に発刊されていますが、二年後に発行された第2号に鹿島開発研究の成果である「地域開発にともなう住民生活の変化と住民意識」を共同執筆されています。1970年代前半を通じて継続された鹿島開発に関する共同研究は、70年代後半になると帯刀所員を中心メンバーとした日立市研究に展開され、この時期には日立と鹿島の比較研究の成果が年報に掲載されています。80年代を通じて日立市は地域総合研究所の共同研究の重要なフィールドとなり、帯刀所員が所長として迎えた「常陽亀山記念館」竣工式では、日立研究の成果である『企業城下町日立の「リストラ」』が記念出版物として参加者に配布されました。さらに、帯刀所員が所長を務めた90年代半ば以降には、阪神淡路大震災を契機にNPO活動が大きく注目され、ご自身も「茨城NPO研究会」の設立、NPO法人「茨城NPOセンター・コモンズ」の設立に関わり、所長退任後はコモンズの代表理事としてご尽力され、大学、地域総合研究所と地域の民間諸団体をネットワーク化する上で大きな貢献をなされました。われわれは、帯刀所員の退職後も、氏が築き上げてきた地域住民、地域産業界、地域のボランティアやNPO等との太いネットワークをより強固にすることを目指して、氏のこれまでの研究所に対する貢献に応えていきたいと思っております。

田切美智雄所員は岩石学、地質学、地球化学、環境科学等がご専門で、最近では今年度10年目を迎えた東海村におけるJCO臨界事故に関する科研費総合研究において、ご専門の立場から臨界事故による土壌の放射能汚染の有無などについて研究を担当していただきました。この科研費調査を基にして開始された東海村と大学との共催公開講座「原子力と地域社会」においても、講師団のお一人としてご尽力いただきました。「原子力と地域社会」をテーマにした研究は来年度以降も科研費プロジェクトとして継続していきますので、田切所員の自然科学分野からの地域環境問題や地域防災対策へのアプローチをわれわれとしても継承していきたいと思っております。

大槻功所員は経済史がご専門で、特に、多くの所員が関わった水戸市史編纂作業チームのメンバーになられてからは、水戸市の千波湖の歴史を地方城下町の近代化の歴史と関連づけて研究され、本年報28号にも「千波湖干拓と昭和戦前期の千波湖をめぐる諸問題-水戸の近代化と千波湖(2)」を発表され、それらの成果として『都市の中の湖 千波湖と水戸の歴史』(文真堂、2001年)を刊行されています。今年度は水戸藩開藩400周年でもありましたが、水戸を中心とした地域社会研究に歴史学的にアプローチすることを、今後のわれわれの共同研究の中でも位置づけ、大槻所員の功績を継承していきたいと考えています。

茨城大学地域総合研究所所長 渋谷 敦 司